慈光

第二十四巻　第十二号

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十七年十二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二八三号）

目次

諸の如来と等し……近角常観……(1)
柳川重行君を憶う……福島政雄……(14)
念仏詩抄……木村無相……(18)
往生とは新生なり……花田正夫……(21)

諸の如来と等し

近角常観

本日は第二回の慶信会である。今日の題は慶信会にちなんで『華厳経』の

「此の法を聞いて信心歓喜して疑いなきものは、すみやかに無上道を成らん。諸の如来と等しとなり」

の文により「諸の如来と等し」としておいた。即ち信心喜ぶ者は、如来と等しい、と云うのである。和讃に

信心よろこぶその人を、如来とひとしとときたまう
大信心は仏性なり　仏性すなわち如来なり

この味わいを話したいと思うのである。

人生消極の悲しみ

まず感じたことより云おうと思います。今度一番初めにまいったのは、昨年九州にまいったみぎり、不思議の御縁で麻生家で話していると、其処へある大家の御主人老夫婦、弟御夫婦がご来聴下され、ここに私の話を聞いて下さる御縁がつくられたのである。その時、私の処へ聴きに来て下さることを発企せられたが、その家の老夫人で、それはその前御長男が亡くなられ、そのためなおさら法を聞かるるご縁が開けて来たのである。ところが其後、別れて間もなくその老夫人が病気になり、本年一月ついに腎臓病で亡くなられた。その亡くなられる時、非常に喜んでわが身の申訳けなきことを語り、喜びながら亡くなられた。

ことに私との縁を、ご本人は申すに及ばず、一家の人達が深く喜んで下され、全く昨年のご縁のため、あの如く合掌称名して安らかな往生が遂げられたのであると、これは今度まいって初めて承ったのである。

で今度はその御主人が、その御不幸のために痛く悲しんでおいでになる、それにお話致そうとまいったのである。

色々感じたことが多いのであるが、中にも今度は、かかる人生の不幸に遇い悲しんで居られるその有様を目のあたり見せてもらって、こちらの方が話しするよりも、むしろこちらが、その実況に対して感ぜさせてもろうたことが多かったのである。むしろ私の方が、或る一種の考えを得させていただいた次第であったのであります。

それは、昨年はじめてその御主人にお目にかかった時は「仏がどうしても分らぬ」と言われるため、

「仏は我々の方から詮索（せんさく）し、さがすのでない。仏と此方と相撲を取るのである。そしてこちらが勝ってる間は分らぬが、いよいよこの世があてにならぬとなった時、その者を捨てさせ給わぬが仏の慈悲であると、仏に打ち勝たれた味わいが信仰である」

と話したのは、昨年来再々話した通りである。ところが今度行って感じたのは、要するに上記の不幸で人生の悲しみの方が深くして、その人生消極の悲しみを転じて仏のお慈悲の積極に立ち入ることがむつかしく、又その消極の方を見せて貰うと、如何にも人生のあてにならぬは、無理からぬ事と感じたのである。故に今日は一面、人生消極の悲しみの方面、及びそれなるが故に如何に仏のお慈悲をいただくべきかについて話したいと思うのである。

皆が自分程不幸者は無いと思つて居る

まず行って御主人に遇った時、私は何気なくこのことを申したのであります。それはさきほど当地の高島屋の主人飯田氏が四十一歳になられる御夫人にさき立たれて、子供が八人ある。八人の子供を置いて、御夫人が亡くなられ、私はその御葬式にも参って来た。話が横になるが、此の間も飯田氏が来て亡き御夫人のことを話されて「妙なことがあるもので、今年の春も家で謡曲をうたい、家内も一緒にうたったのである。その時家内が云うには、自分達は定まった仕事はなし、子供が八人あるから、老後は八人の子供をあちこち訪ねて、余命をたのしもうと思う。しかし順当に私の方があとになればよいが、若し私の方が先に死んだら、その時はかくかくして呉れと話したことがある」と語られた。ところが先日にわかに難産のために亡くなられたのである。でこの話を飯田氏がせられたのが、丁度私の出立前であったから、私はそれが頭にあったから、行って会うなり、悲しき話をするのは、悲しみを共に分つつもりで、何気なくこのことを話したのである。

ところが主人は私の話すのを、何かすまぬ様子にて聞いて居られたが、やがてほろりとなって言われるには「若い人が亡くなられたも困るだろうが、年寄りて亡くなられたのも実に困る」と、私はこの一言で言葉をふさがれて、最早や何とも言いようがない、成る程、私の慰め方はさかさまであったかも知れぬ。

「若い人が亡くなられたも困るだろうが、年よりて亡くなられたも困る」と。如何にも人間は銘々自分自分の境遇を、最も不仕合せとしているに、他所の不仕合せを出して慰めんとするは全く無意義であると思うと、もう物が云わ

れなくなって仕舞ったのである。

聞けば主人は亡くなられた時「一代苦労難儀をさして、一代それでやって来て、ようやくこれからと思うている中に、何一つ楽しませることもせず、実に可哀相なことをした。一代ああこうと苦労ばかりさせて、ありがたい話も充分に聴かさず、実に残念だ」と言われたそうであるが、かくこの時の挨拶も「若くて亡くなられたも困ろうが、年よりて亡くなられたも困る」と、ほろりとしてしまわれたのである。

そこで私は、それより段々お慈悲の上より話して、先ず私自身気のついたことは、人間はすべて、人生問題、信仰問題の上において、一人々々の憂える所は、自分ほど不幸な者は無いという、この一つである。「自分のような性分は特別に悪い」「自分の如き特に悪しき者は他にない」と皆各自がそう思うて居るのである。「世間の者にくらべると、あれだけの財産に為し上げて、死んでも不平は云われぬ」などとは、他より眺めて云うことで、その人一人々々にとっては「自分は特に不幸である。自分ほどつまらぬ者はない」と、各自にみなそう思うて居るのである。したがって望みを立てる場合にも、他にくらべると、そんなに藻掻かんならぬ必要はないと思われる人でも、その人にする時は「自分ほど足らぬ者は無い、自分程不幸な者はない」と、これが人間のすべての根底になって居るのである。

これは能くお慈悲の上で、自分程悪い者はないということにつき、五逆十悪などいう言葉はあるも、私の罪の深いことは、到底そんな言葉でいわれぬという人がある。なる程、その人にする時は、五逆十悪などいう言葉はあっても、それは人並の言葉で、自分は人とは特別に、特にして見ようなく、悪いとなっているのである。

で、今の「若くて亡くなられても困るが、年老いて亡くなられたも困る」と云われた一言も、自分のは人と違って特別の不仕合せであることを言われた言葉であると思うと、これに対して他にもかかる不幸があると話すことは、その人にとっては何の慰めにもならぬ。成る程ここになると、平素いただく『歎異鈔』の

「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」

で無ければ、到底満足させていただけぬことを深く思ったのである。

さてすると、仏のお慈悲をここでいただくは、かく我々一人一人が、かく最も不仕合せなる自分なることを仏かねて御覧になり、その一番不仕合せな汝故哀れで捨てられぬとの御親切なることを頂かなくてはならぬのである。私が特別に悪しき者なることをかねて見そなわして下され、そ

の者の特に悪しく、不仕合せなのが可哀相で離されぬとあるが、仏の大悲の根本なることを頂かなくてはならぬのであります。

特に惡しきを特に哀れみ給う

このように種々話して居る間に、又一人癪（しゃく）の持病で始終困って居らるる女の方があって、聴きに来てどうも苦しんで居られる様子であった。で私はその方に「どう頂いておいでになる」と聞いて見た。すると云わるるには、自分は兄弟三人あって、みな不仕合せで、中でも私が特別に不仕合せである。が、仏はそれでもかかる者を遣る瀬なく思召し下さると頂いて、喜ばして貰うて居るとの頂きようであった。これでは到底安心が得られる筋が無いのである。

私はその方に「兄弟がみな不仕合せであるが、中にも自分は特に不仕合せである、がこの者を仏は遣る瀬なく哀れんで下さるでは本当の安心は得られぬのである。どうかというに、兄弟みな不運なものばかりであるが、中にもあなたは特に不仕合せである。しかるに仏はあなたのその特に不仕合せな、そこが可哀相でならぬとのことである。今あなたが一番自分を苦しいとして居らるる、そのあなたの特に不幸なそこを見て下さるが、たった一人仏なのである。

今あなたが兄弟中でも特に不仕合せであらるるを見て、そのあなたのひとり不仕合せであるが、特に哀れで捨てられぬとあるが、仏の哀れみである」と話したら、その人大いに安心して下された様子であったのである。

仏のお慈悲は、十方衆生平等の哀れみであって、頂くは五逆十悪の悪人が、みな等しく頂くのであると一口にいっているのであるけれども、いよいよ自分自分という段になると、人間は「自分程不仕合せ、自分程不幸な者は無い」と、自分ばかしを考える者故、何人も自分なる者の意義が無いとなるのである。そこへ、その不仕合せな自分に対し皆んな合いのお慈悲を聞かされるもの故、如何にしても安心がならぬのである。ところが、その特に不仕合せな、特に致し方なき自分の身の上を、特に御覧下されたが仏の特別のお慈悲故、ここを能く頂かして貰わねばならぬのである。

かく話すと私は、いつも自分の子供のことについて考えるのであります。私は子供が三人あって、皆それぞれ性質が違うにつけ、これに対するこちらの哀れみぶりが、又それぞれ違ってくるのである。気の強いのは強いにつけ、弱いのは弱いにつけ、又無邪気は無邪気で、等しく哀れに思うは同じであるも、その思いぶりにその者〳〵の性質に応じ、夫々異った思いが出て来るのである。これより言うと十方衆生等しく仏が哀れと思召すは同様であるも、そのお

心の上より一人々々、其者々々の特別の境遇、歎き、心中を御覧あって、其者々々に応じ、哀れと思只し下さる思召し具合が一々違ってくるのである。

これは始終言うことであるが『信巻』にある善導大師の如意の釈がこれである、『観経』に神通如意ということがあって、その如意を大師がお知らせ下されて

一には衆生の意（こころ）の如し。彼の心念に随って、みなまさにこれを度すべし。二には弥陀の意の如し。五眼まどかに照らし、六通自在にして、機の度すべき者をみそなわすに、一念の中に前なく後なく、身心等しく赴き三輪開悟して各益すること同じからざるなり。

とある。即ち私共一人々々の心中をみそなわして、其者々々の境遇、心状、悲しみ、歎き、缺乏、その者〳〵の身上に応じて、哀れみ化益して下さる処も同じくないのである。結果は同一の広大なお慈悲一つをお知らせ下さる外なきも、其者の性分々々に従って、種々心を廻らし、哀れみ導きて下さる、そのお心の運び具合いがみな違って来るのであります。

子供の性分を知らぬ親じや無い

さて主人はそれほど悲しんで居らるるのであり、殊に昨年あれまで喜んで下されたのであるから、法の話がたやすくはいるかというに、なかなかはいらぬ。何故かと云うに悲しみ極まって、お慈悲で慰める余地さえも出て来ぬのである。言わるるには「昨年お目にかかって、家内は分って喜び、ありがとうございます」と、昨年夫人が分って喜ばれたを、今度夫人が亡くなられたにつけ思い出して喜ぶという喜びになり、今現にそう言っている自分を遣る瀬なく思召し下さるという喜びにどうしても出て来ぬのである。ところが今度は反対に、お子さんの方が聞いて下されたのである。

それは次男の方であるが、昨年は親に聞けといわれて仕方なく聞きに来られたのであるが、今年は行くなり直く聞きに来て、九州大学の総長が会いに来ても、会わずに夜おそくまで聞いて下されたのである。

言わるるには「昨年あの時充分聞いて居れば、親が存命中どれ程の滴足せられたか知れんのであるのに、昨年は聞くは聞いたが充分に聞かず、ために親の存命中に喜びが見て貰えないで実に残念である。こんなことなら親の存命中に能く頂いて、親に喜んで貰って置いたら」と、これがずしんと胸に来ているのである。

それで初めて聞かるるかと云うに、そうじゃない「前聞いた事はあるが、其時は気を取り詰めなければならぬと思い、炭坑の奥深いところにはいって、今死ぬると気を取り詰めて見たけれど、どうしても分らなんだ。そのうち或本

を読んでる中に、自分の方から救かるのでないという事を思い、それでは死んだら助けて貰えるのだろう位になり、おいおいそんなことになってしまった」と云うて居らるるのである。この方が今度は大層熱心に聞いて下されたのである。

そこで私が申すには「成る程それ程親を慕わるるは誠に結構と言わなければならぬことである。さりながら、今あなたが昨年親の存命中に充分聞かなかったは済まぬと、それほど身を苦しめ心をわずらわされるは、親の喜ばれぬことである。今あなたの性分をかねて見抜いて下さる親はあなたが昨年聞かれなかったとて、それを不足に思う如きそんなあなたの性分を知られぬ親じゃない。然しそういうあなたの性分を知って居らるる故、そのあなたに聞かせたい、とあるが実にあなたに対する親の御親切である。この親の慈悲が分れば、かくの如き自分に、親はそれほどまでに思うて下さったか、ありがたいと、その親の御親切を受ければよろしいでは無いか。親はあなたがそんなことに気を苦しむよりも、お慈悲を聞いてくれるのが、何より本望だと言うて下さるのである。親はこちらが悪しければ悪しきにつけ、言うことを聞かねば聞かぬにつけ、その聞かぬ奴をばいかぬと捨ててしまわずに、其の聞かぬ奴故いよいよその者のために遣る瀬なく心を痛めらるるが親である」と話したら、この時はじめて此の点に大いに意を安んじて下されたことである。

ところがかく一方は親子の関係故、直ぐに喜んで下されたのであるが、一方は夫妻の関係故、自分の方より哀れむという方が強くなり「自分がかくお慈悲一つで参らせて貰うから、あなたも同様にどうかこのお慈悲一つを頂いて下され」とある、亡くなった妻の心なることが、頂けんならぬに、いただけぬとなる。

妻子珍宝及び王位不隨者

そこで話してるうちに、ふと私は大いに感じたのであります。それはどちらかと言えば、むしろ私自身が大いに知らせてもらったのである。それは、親とか、妻を失って悲しむことは誰でも同様であってあながち比較するでは無けれども、特にこの方の場合においては、それが成る程とお察しすることが出来るのである。

それは人間は大なり小なり、その者〳〵の境遇に従って或は自分の家事につけ、或は自分の仕事につけ、何等かの望みをもち、考えを抱いてる間は、なおこの人生の上に、その為に人生的になるのであるけれど、兎に角ハキハキとその望みのために全体が動いてる様が見えるのである。ところが、まいって其のお宅の様子を見るに、如何にも広大な邸の中に、今度なども立派な新築が建ち、そこで私に

話してくれとのことであったけれど、雨が降って話しに行けなかった程故、実に広壮な邸宅である。そのうえ一方にはなお盛んに普請（ふしん）がどしどし始まっている。さて人間は、何か望みを持ち、やっとる間は、又それだけの楽しみがあるのであるけれど、そのお宅の様子を見るに、かく家を建て、盛んに樹木など植えておらるるけれど、そのものの上に更に望みというものが見えぬのである。

それは何故かと云うに、人間はこれだけの財産を作ってと思うてる間はまだそれだけの望みがあるであろうも、熟々様子を見るに、何事も最早やみな出来上ってしまって、更にこの上の望みが無くなり、何をやっても世の中は、この上面白いことが無いとなっているのである。

人間は——決してそれをよいというのではないが、まずい物を喰っている間は、まだ何でもという望みがあるのであるけれども、あれもこれも、思うことはみな出来あがり飽き足りて見ると、さて人生は無意味なもので、何をやっているのかさっぱり分らぬ。建てたき家は建て、植えたき樹は植えても、もうかく飽き足って見ると、他より見ても一向精の無いもので、つまり人生に欲というものが、最早や見えぬのである。

しかもそれが世間にありがちな、それは大きな家や財産はあることはあっても、それが親譲りとか、又は公共的のものであるというと、その感じは少いのである。たとえば早い話が、本山の如きものであって見ると、みんなで寄合ってやっていると思う故、さほどにも思わぬ。ところが独力で一代やってやり抜いて、為すべきことは為し上げて、あれだけの精力を出して、その充分飽き足った結果がこれであると思うと、はたから見ても世の中は面白くないと、感ずるまでにそれがあるのである。

さてここまでになって、ここへ死という問題が出て来たのであるから、まるで人生が何のことだか分らぬのである。かくこれほどまでに為しあげて、ほとんど人間界で想像も及ばぬ果報な身の上になり、さてこれから妻にもらくをさせたいと思うて居らるる矢先きに、がらりと亡くなられたのであるから、同じ人生の無常を感じるというにも、如何にも感じようが別であろうと思うたのである。

『論註』の中にも「顚倒（てんとう）の善果よく梵行（ぼんぎょう）を壊す。」

ということが仰せられてあるが、如何にもその如く、かくもこの果報が多いだけに、それだけ失望もひどいであろう。そのこの世の果報にも段々あるが、全く独力でここまでなられたのは実に例が少ない人故、それ丈ご心中の程も私にはよく分るのである。ここになると如何にも釈尊の説かれた

「妻子、珍宝、及び王位、不随者」

で、全く人生は何一つ当てにならぬとのことを、私は色々見ているうちに、スーッと私の心中に感じ来たったのであります。

仏かねてこれを知ろし召し

サア、すると平日一応言うているくらいの事でない。たとい人生において如何なる成功をしようと、結局人生はこれであると思い来たると、如何にも人生のあじきなき様が目のあたり見ゆるのである。私はそこで実によきことを知らせて貰ったのである。

私は金を持った経験はないが、それが幸に金が出来、これほどの大した身分になったとしても、ひと度死の問題に行き当ると、それがこのように何の役にも立たぬ様を眼前に見せて貰ったのである。言い換えるとつまり私が思わぬ莫大の金を一度に与えられ、それを忽ち失った味わいを、忽爾として私自身が知らして貰うたのである。

早い話が、私共宗教上、有形無形のことにつき、たとえば、かく私が諸方に伝道して、皆さんが喜んで下さる。すると信仰上のことであるから、物質上の宝とか成功というものとは違うようであるけれども、矢張り人間故、各方面に多くの人々が喜んで下され、法がひろまることとか、信者がふえるとかいう結果がどうしても目につくのである。

するとお慈悲の上でありながら、不知不識の間に矢張り事業風になりやすい。すると、その他、政治であれ、教育であれ、実業であれ、何をしようが結局人生の効果はかく畢竟あてにならぬ様を、眼前に目に見せて貰うたのであるかと、私はここに人生の消極方面がありあり、ずらりと私の心中に目に見えて来たのである。すると『歎異鈔』の

「仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけりと知られていよいよたのもしくおぼゆるなり」

仏のしろしめし下されしは、ここであったのかと、色々に思うているうちに、続々私の心中に分ってきたのであります。

サアーそうなると「アー仏はこれをかねてしろしめして下されたのであるか」「これを遣る瀬なく思し召し下さるのか」と、もう感涙にむせびて、人に話しどころか、自分がそのお見捨てなき仰せに腹ふくれ「如何にも人生はこれじゃ、人に何のかのと言うてるけれど、いよいよとなるとかく当てにならぬのじや、これを仏はかねてしろしめし、この酔生夢死が可哀相との大悲より、このまことならざる私を、これを捨てぬとの御まことは！」と、ここを皆様にもよくいただいて貰いたいのである。

でかく一面、人生の消極がこれほどひどくなって見ると

積極のお慈悲に移れぬも、実に無理ないことと思うたのである。人間はあまり悲しみきわまると、もう話をきき分ける餘地さえも無くなってしまうのである。また反対に、私共人生の喜びに浮かれていると、今度はまた人生のあてにならぬことを知らせて貰う餘地がなくなってしまうのである。昔から、地獄は苦しみが多くて法が聞けず、天上は楽しみ極まって法が聞けぬ。人間界が丁度聞法によいところというのもこれである。私共いよいよ聞いて頂かせて貰えるは、苦しい中にも、苦しい心中にお慈悲がとどいて下さる餘地があって、はじめて頂かせて貰えるのであります。

大悲の積極は人生の消極の極所に在り

話が大分混雑するが、今度は同時に、そこへ御来聴の御存じの峠さんであります。峠さんが一昨年ご上京の帰りに友人の赤松さんと申す方に、私の本を土産として贈られたそれが縁となって赤松さんの御主人が、大層お喜び下されたのである。その赤松氏の御夫人が昨年重症にかかられ、医師より見ると、最早やどうしてもたすからぬということになってしまった。それが平日いただいて居られたためにそのいよいよ危篤となった時に、不思議にも危険よりまぬがれ、ついに全快せられたのである。

それはどうかというに、昨年いよいよ最早や駄目となり自分にも漸次死が近よって、気が遠くなってきた。するとそばについておいでになる御主人が言わるるには、「こんなに早く別れようとは思わなんだに、いよいよ別れなくてはならぬか。子供等にも分れをさせたがよかろう」とて、お子さんたちが、皆火鉢で手をあたためては、お母さんの頭を撫でられる。その時ふとその御主人が「こんなに早く別れようとは思わなんだに」と云われた一言が耳にはいり、「自分は決してこのまま別れるのではない、皆が共にお慈悲を喜ばせて貰い、自分はさきに浄土に参って待つのである」とのことが、すっきりその言下に分って来て、その時皆にも立派な別れの言葉を告げられた。そうしてそのまま気が遠くなったのであるが、医師の注射で再び戻り、もどってから漸くその時のことを色々と思い出し、泣けて〳〵ならなかったというお話である。これは前とは反対に、平日頂いて居られたために、いよいよ死という人生の消極きわまった刹那に、積極の大光明が現われて下された話なのであります。

で今度も、その御夫人がそのことを話されて「私が喜ばせて貰うたは、平日のごく些細な人生の煩悶という如き、つまらぬ事より喜ばせて貰うたのであるに、それが実に一大事も〳〵これ程の後生の一大事とは思わなんだ。平日些細なことから喜ばせて貰うていて、かくまでの事はありません」と、喜んで居られた。その時の主治医の方も、この事実にびっくりして「真宗の安心は、まるで禅みたようなものだ」と言うて居らるると聞き、私は「こんな有難いことを、禅くらいに云われてはたまらぬ」と話したことがある。これが御縁で、その主治医の方も、今度は聞きに来て下された。これが今の人生の消極が転じて、積極の大慈悲となったものである。

ところでここに肝賢なことは、何人も「この世が当てにならぬ」「自分に罪深くてしようが無い」という、この人生消極の方面だけなら、誰も分るのである。それゆえここで「さてかく仕ようのない身なれども、仏はこれをたすけ給うのである」「この世は当てにならぬが、未来は極楽にまいらせて下さるのである」となると、忽ちここで此方の消極と、仏の積極の恵みとが出違いになっていただかれぬのである。頂けると、頂けぬとは、ここ一つにあるのである。

仏のお慈悲は、先きに云う如く、私が殊に不仕合せな、その殊にして見よう無いのが殊にあわれだとの大悲故、私共がかく当てにならぬ、かくしようの無い、その一点光りの無いそこをご覧じ下されて、汝がして見ようなく、虚仮不実なほど、その一点まことなき不実の汝が捨てられぬとある仏のまことにましますのである。故にいよいよまことならぬ私と、そのため、そを捨てさせ給わぬ仏の御まことと、遂に仏の御まことに打ち勝たれて、不真実(ふまこと)の私が負け、かくまでやるせなき仏の御まことにましませしかと、私が仏のまことに頭がさがり、いただけた時、はじめて当てにならぬ此の世であったと、人生から手が離され、お慈悲一つに安んじさせて貰えるのであります。

今の赤松夫人の場合でも、いよいよ今死ぬとなると息が絶える故、イヤでも応でも、肉体は別れなければならぬ。そうなると、そうなる自分をかねて知ろし召し、お見捨てなき仏のまことばかりは捨て給わぬ故、浄土に参らせて貰い仏になるは疑いないとなる。故にかくの如く生死の際に力強くあることが出来たのである。故に肝賢は唯このひとところである。そのひとところとは、私のふまことを、飽くまで捨てさせ給わぬ仏のおまことにましますという、この一所である。この飽くまでお見捨てなきまこと一つさえ頂けば、たといこの世のふまことが如何にはげしかろうがこのおまことある上は、これ程ありがたいことは無いとなるのである。今度九州でもいたるところで話したは唯このひと所であったのであります。

お慈悲と私と出違いにある人

こはよく気をつけぬと、どうもこの仏のおまことと私のふまことが、出違いになり易いのである。たとえば能く御同行の方などが「私の虚仮不実の胸の中に、仏の清浄真実

のおまことを頂いて……」と云われる。それがまるで言葉だけになっているのが多いのである。虚仮不実と云っているも言葉ばかりなれば、清浄真実も言葉だけに止まっているのである。そんな仏の清浄真実と、私の虚仮不実と、別々に頂けるわけのものじゃないのである。

どうかというに、分り易く云うと、私共が日常交際の間柄などにおいて、かの人は親切なる人である、すなおなる人である、誠実なる人であると、此方が感服してどうしても頭の上がらぬ人がある。これが此世で所謂まことある人というそのまことである。しかるに向うはそんなにまで気の廻らぬ誠実な態度でこちらに向われてるのに、それに対して自分はどんな態度で向っているかというに、自分はその人を疑い、悪しく気を廻わし、表には何気なき様につき合っているも、心にはかくかくの悪しきふまことを抱いて居るとなれば、それで我々が真に安心が出来るかどうか、とこういう問題であるのである。

これは私共自分自分に考えて見れば、能くわかるのである。即ちこの場合にあって、我々「自分は先方に対して悪しきふまことの考えを持っているも、併し向うは飽くまでまことをもって自分に向ってくれるのである」——又「此の世は何時知れぬ、当てにならぬ人生で、如何にも妻子珍宝、及び王位不随者である、けれども仏はまことを以て私に向うて下さるのであって極楽にやって下さるのである」と。これで我々ほんとに安心が出来るかというに、到底安心は出来ないのである。

その出来ぬのは何故かというと、これでは人生の当てにならざることや、私のふまことであることと、仏のお見捨てなきまことが、出逢いになってあるからなのである。即ちかくふまことなる当てにならぬ自分が、今死ぬるとお慈悲で極楽に往けるという、ここがすこぶる虫のよき問題になっているからなのであります。

然らば、その当てにならぬ、ふまことの我々が、何処で安心させていただくか、というに、私はかつて「此の世は罪深くして見よう無いが、未来は極楽にやっていただく」という頂きようをして居らるる人に対して「此の世で既に罪悪く悩ましき有様であってみれば、その者が死んだら勿論地獄へ行くじゃないか」と云うたことがある。私共すでにこの世が罪深く、当てにならぬということは、即ち言い換えれば、私共が永劫に闇ということで、即ち永劫たすかりようがない身の上とのことである。すると此の世は当てにならぬが、未来は極楽という頂きようは、畢竟言葉のあやに過ぎないことになってしまうのである。

サアすると仏のお慈悲はどういうのか、というに、今云う如きそんな私の虚仮不実でしてみようないことと、仏よ

りそれを遣る瀬なくたすけたまうこととが、別々にあるので無いのである。仏の真実の大悲というはどうかというに私が今現在の不実が可哀相で捨てられぬとある仏の御真実なのである。私が今かく罪深く浅間しいのが哀れで捨てられぬと、私のこの不実に飽くまで愛想をつかさず、不実なれば不実なるほど、よけいその者を遣る瀬なく思うて下さるが、仏の大悲の真実であるのである。

これを先きより云う喩でいうと、私の方は先方に悪しき考えをもち、隔て心で向うている。しかるに向うはその私に飽くまで善き思いを持ち親切にして下さるのである。となると、これでは、向うの好意が有難いと云いながらも、それは何処までも自分の悪いところを押しかくして、即ち体裁よく自分をつくろうて、向うの親切をうけてるという頂きようで、甚だ横着な頂きようとなる。即ち私は悪いことをしているけれども、向うは頓着なく善くして下さるからありがたいという横着根性である。又これが反対に出ると、向うはあれまでに親切にしてくれるのに、自分の方は悪しき考えがやまぬ、実に済まぬと、今度は悪しさが気にかかる遠慮心になって来るのである。即ち自分の方が悪くてすまぬと、今度は何処までも消極一方になり、悪くていかぬ済まぬと、わが悪しさばかりを悲しむとなる。

かく横着に出るか、遠慮して引込むかのいずれかとなりこれで到底本当の安心にはなれぬのである。

吾が眞実は疾くより、
汝の不実を見抜いてなり

すれば私共、いよいよ本当に安心をさせていただくは何処かというに、その向うの親切なる気のよき人というが、唯一応の気のよいでなく、その人がかく色々悪しき計らい根性で計らっている自分に対して云わるるには、「お前の心中に持っている隔て心も、お前の隠くしている疑いの根性も、自分の方では疾くにみな知り抜いているのである。お前が自分に対して悪しき心で向っていることも、自分の方では疾くにみな知り抜いているのである。お前が当てにならぬ〳〵と云うてることも、お前が自分に対して悪しき心で向っていることも、自分の方では疾くにみな知って居る。お前はそれを知らずに、わしの方で今まで親切にしていると思うてるのであるが、お前のそれを知ったればこそ、知れば知る程、それが可哀相で、いよいよお前が捨てられぬ心より、長い間修行工夫の結果こしらえたのが極楽浄土なれば、お前の不実を知り抜いて、それがどうしても捨てられぬのがわが真実である」と、ここをよく頂かして貰わねばならぬのであります。

故に私共が仏の真実を頂くというのは、かく如何な私の不実も不実にすればするほど向うの方からはいよいよ真実

にして下され、私の方がやればやる程、その上〳〵と向うから遣る瀬なく言うて下さる御親切であるために、遂に如何な不実の私も、ここでとうどこちらの方が頭が下り、「それ程までに私をお見捨てなき真実であったか」と、ここでその御真実一つに腹ふくれ、わが身の悪しさが気にかからぬようになってしまうのである。

我々が何故にわが身の不実が気にかかるかというに、自分の不実を善くせんならん〳〵と思うてるからこそ気にかかる。しかるにその如何にしてもよく出来ぬ、それが捨てられぬとある御真実と分れば、その御真実一つに腹ふくれて、かかるして見よう無き私を、お見捨てなき御真実のありがたやと、あらゆる自分の不実も、その御真実のために気にかからぬようになってしまうのである。そのかわり如何にも自分の不実が申訳けないと、これを他より見ると最早や不実をしようとしても再び出来ぬようになるが、お慈悲に腹ふくれた味わいである。これが真に仏の清浄真実に夜の明けた味わいなのであります。

故に我々のこの人生のして見よう無き上より云う時は、宗教、教育、政治、実業、何をやろうが罪ならざるはなく、虚偽ならざるはなく、所謂、世間虚仮、唯仏是真である。しかしながらその虚仮不実を奥の奥まで知り抜いて、それを飽くまで見捨てぬとの仰せが、かく一通りでない故に遂にこのお慈悲に打ち明かされ、謝り果てて頂く故に、今度は設い商いをもし、奉公をもせよ、猟すなどりをもせよである。かかるして見ようない俗界に在る上は、如何に思うても世の中の争いもやむを得ぬことを知らせて貰って、お慈悲一つに安んぜさせて貰って行くとなる。しかし安んぜさせて貰うと云えばとて、平気で争いをしてよいというようなことは一点もない。どうかというに、去りながら、何程争いを止めようと思うても自分には止められぬ、それまで知り抜かせられて、そのためのやるせなきご親切と分ると、ここで今までこの広大なる御恵みあることを知らずして、かれこれ思うて居ったは、みな自分の申訳けなきあやまりとなり、ここで今までの人生の立場が一変して来るのである。ここをよく気をつけねばならぬのであります。

大正三年求道十一巻。　（この講話次号に続く）

× × ×　× × ×

人間の教育　フレーベル

親は子供のために色々と苦労を続ける。しかし、その時は、子供がすこしも気づかず、すこしも汲みとっていないように見えても、いつの間にか、両親の示す実例は、子供の心に深くきざみつけられているものだ。

柳川重行君を憶う

——親を慕うて仏教へ——

福島政雄

仏縁は何処にあるか。縁は様々であろうが、我が柳川君の如きは実に記念すべき思想転換を行い、左翼に傾いて居たのが仏教の中道に転じた著しい例であると思う。

君は石川県大聖寺に生れた。実は武士の家筋であったので、そこには昔ながらの冒しがたい家風が残って居たという。君の祖父上は維新の折武士から教育者になられた方で清節謹厳な人であったと聞く。併し君の父上は他から迎えられた方であったが、そうした厳しい家庭にはなじめない性格であったというので、いつしか家を去られることになり、君は母上と家に残されたのであるが、その母上も間もなく病気で早世されたので、君は柳川家の一粒種として祖父母の慈愛の手に育てられることとなった。そしてもの心つく頃になって、父親が外にあることを知るのであるが、その父親に逢うことは周囲の事情で許されず、人知れず幼な心を悩ました。併し母に死に別れて父を慕うということは人情の自然である。君は此の自然の情を満足せられずに青年期に達するようになった。

柳川君の母君と父君との心の関係についてはよく知らない。お父さんがお母さんを棄て去り、お母さんはお父さんと別れたままで世を去った。君は青年期になって父親との交渉を祖父上などから禁ぜられて淋しい心で日を送ったようである。その淋しさの結果であろうか、思想が社会主義に傾いて大杉栄氏の著書などに親しんで居た。私がはじめて君を知ったのは其の頃であって、君が小学教員をやめてあらためて広島高等師範学校に入学してからのことである。からだが弱くて健康がすぐれなかった君は、高等師範を僅か二ケ年ばかりで退学して、また小学教員になった。それは「渾沌」という雑誌を君と松本義鑒君とで出し始めて私が殆んど毎号執筆するようになってからである。

母親には死なれ父親には逢えないという有様になった柳川君の心は、一筋に異性を求めるという方に向い、恋愛結婚によって自らを慰めるということになった。その結婚の

相手は愛子さんであったが、君は殆んどいのちがけのような真剣さで愛子さんと結婚したようであった。併し妻に対して母のような慈愛を求めるのは無理なことである。母を求める君の淋しさは続いた。そして迷いはあらぬ方向に転じた。郷里の方の小学校に就職して居た君は、同じ学校で教員をして居た女性の眼の魅力に囚（とら）われて、激しいあこがれを感じ、その女性の眼が大空の星のように見え夜の星を仰げば、その女性の眼が見えるという、殆んど狂乱するばかりの有様になったという。

その頃から柳川君のお父さんの妹であった叔母さんが、親がわりになって君の世話をして居たのであるが、非常に心配して君を相手に逢わせないように苦心した。併し愛子さんは落着いて居て、決して嫉妬の態度をあらわさなかった。折を見てあの人に逢っておいでなさいと云う有様であった。叔母さんはその愛子さんの態度をもどかしく思って居られた。併し柳川君の狂恋は遂に相手と一緒に夏休みに浅間山に登ってその噴火口に身を投げて心中しようと約束するまでに進んだようであった。

これはいけないと自分でも感じたであろうか、または他に心配してくれる人があったであろうか、その狂恋の心の糸を断ち切るように、大阪に転じて小学校に奉職した。その後の君は少しづつ落着いて行った。そこには愛子さんの目に見えぬ力がはたらいたことと思う。二人の娘達が生れて次第に生い立って来るに連れて家庭が君のために唯一の楽しい場所になった。私はよく大阪に行っては君の家に泊めてもらったが、お酒を楽しむ人であった君は、夕食には御飯をたべずにお肴と酒ばかりで好い機嫌になると、「うちの嫁さんを見て下さい」などと云って心から楽しそうであった。

こんな家庭の楽しみがあっても柳川君の胸中はやはり非常に淋しかったようである。それは親の慈愛を求める淋しさであった。祖父上と父上との和解に心をくだいたのも此の頃であった。松本君がその和解のための使者の役目をしたこともあった。

渾沌社の主催で法隆寺の夏季求道会を催すようになって佐伯定胤猊下のお導きを受けるようになり、君はその世話役として熱心に立ちはたらき、足利浄円先生から章駄天という異名をいただいたりした。佐伯猊下からは非常に可愛がられて、猊下との親しみが加わるにつけて、猊下を父親のように感じたであろう。「父親というものはこんなものか」と私に言ったこともあった。併し猊下はお師匠様であり、父親ではないので君はまだ本当の落着きを得なかった。

併しながら法隆寺を中心として十年間の求道を続ける間

に仏陀の親心が次第に柳川君の胸に染み込んで来た。比叡山で行なわれた臼杵祖山先生の大無量寿経の熱烈な御講義なども君の心に深く触れたことと思う。また足利浄円先生には始終親しんでその感化を受けたことも少なからずあったと思う。仏陀の親心を身に感ずるようになった君は生みの父親に対する心持も深くなって来た。遂にお父さんと二人で法隆寺にお参りするようになった。そして私に対して「やっぱり親でなければなりません」と言うようになった。私はその言葉を聴いて心から嬉しかった。

それからの柳川君は全く仏陀の真実心をいただく人となり、仏教の求道者となった。君は随分無遠慮に自分の心持を言う人であったので、或る時などは大阪で私について来て私の講話を聴いて「今日の先生の講話は卑しくさえ感ぜられた」など鋭い批評をしてくれたこともあった。仏陀の御教を直感的に感ずるという風で「足利先生の御宅へ行けば、御家の隅々まで仏法が染み込んでいるので、特に仏法のお話を聴かないでも仏法が感ぜられる」と云ったことなどもあった。

仏法者となった柳川君自身も親心の人となって、二人の娘達を心から可愛がるようになった。お酒を飲んで機嫌よくなって言う言葉が変って「うちの娘らを見て下さい」と云うようになった。そして道子ちゃんと静子ちゃんとを此上なく可愛がって居た。

昭和十六年の春、私が満州の建国大学に赴任することになってお別れのため大阪に行った時に、柳川君は非常に淋しがった。そして恰度一緒においで下さった臼杵祖山先生をつかまえて「どうぞ今後は一年に一度づつ此の大阪においで下さるように」と、心から臼杵先生にお願いしていた君の姿は今なお目の前に見えるように感ぜられる。

此のように君は純情の人で、仏教によってその純情が正しい方向を与えられたのである。人を愛しまた人にもよく愛せられた。小学の先生としても君は小学の子供らと遊ぶということを心から楽しんでいた。そして一方ではなかなかの読書家であった。私の著書などもよく読んでくれて、ほめたりくさしたり無遠慮に批評した。校長になってからも「一人くらいは読書家の校長が居ても宜しいだろう」と云っていた。

併し校長になって内外の煩雑な事務に接して行くことが君にとっては致命的なこととなったと思われる。元来虚弱なからだであった君には恐ろしい病魔の自覚があって君を悩ましていた。昭和十八年、四十八歳を一期の急死、それを聞いた皆の心は深く柳川君の死を惜まずには居られなかった。私はそれから半年の後、新京を引きはらって京都に転居して来たので「柳川君はなぜ半年待ってくれなかった

ろう」と愚痴の思いを起さずにはいられなかった。

君は煩悩の児、私も煩悩の児という点で同気相応するというところがあった。性格の一面に共鳴するところがあったのである。併し一方では私と非常にちがった一面を持っていた。人と出会って嗟咄（とっさ）の間に相手を喜ばせる言葉が直に出るという風であった。私は人に対して日常の「お早よう」とか「今日は」とかいう挨拶もろくに出来ないという有様なので、柳川君のこの美点は羨しいほどであった。或る年の夏、一緒に阿蘇山に登ったことがある。その登山バスの中で、バスガールが阿蘇と雲仙云々というような歌をうたったのに応じて、愉快な話を連発して同乗の人々を非常に喜ばせたことがあった。それで無愛想な私は、柳川君と一緒に歩けば誰に出会っても気楽であった。

おもえば柳川君が世を去って既に三十年、終戦後今日までの何とも言えぬ教育界の有様を見るにつけ、また教育者が真面目な読書を殆んど行なわないということを聞くにつけ、柳川君のような純真の教育者が一人でも多く居たらばと思わずには居られない。「在るは無く、亡きは数添ふ世の中に」と歎いたのは小野小町であったが、八十三歳の今の私も「あはれいづれの日までなげかむ」という感が深い

「この世が淋しくなればお浄土は賑かになる」と足利先生が言って下されたこともあり、往生の人々を追憶する私の心は、その人々を尽十方の無碍の光明に一味になって居られるとは感じながら、それでも淋しい心にうかぶ愚痴の思いは何ともならない。人間怱々として衆務を営み、年命の日夜に去ることを覚えず。私も毎日怱々として雑務に追われているが、辿り行く道はただ念仏一つの道である。念仏の中に往生した様々の人々のいのちの響きがある。柳川重行君のいのちもひびく。そこに私の残れる人生の一歩一歩の辿りがあるのである。

（昭和四十七年十月六日稿了）

徒然草（七十四段）

蟻の如く集りて、東西に急ぎ南北に走る。高きあり賤しきあり。老いたるあり若きあり。行く所あり帰る家あり。夕にいね朝に起く。いとなむ所何事ぞや。生を貪り、利を求めて止む時なし。身を養いて何事をまつ。期する所、ただ老と死とにあり。その来る事速にして、念々の間に止まらず。是をまつ間、何の楽かあらん。惑える者はこれをおそれず。名利に溺れて先途の近き事をかえりみねばなり。愚なる人は、またこれを悲しむ。常住ならんことを思いて変化の理をしらねばなり。

念仏詩抄

木村無相

お声

和上
おおせに
〃お声が
おやさまぢゃ〃

※和上＝江州源通寺、禿顕誠和上

ハダシ

念仏の大道を
ハダシであるく
戒行慧解の
ハキモノなしに
煩悩具足の
ハダシであるく

〃煩悩具足と信知して
本願力に乗ずれば
すなわち
穢身すてはてて
法性常楽証せしむ〃

秋の女に

一、

秋の夜ぞらを
みてあれば
したしきものの
往きませる
西の浄土の
おもわれて
ナムアミダ仏
もうさるる

二、

西の浄土の
億万の
窓かとみゆる
星のかず
そのみ光を
みてあれば
ナムアミダ仏
もうさるる

となえつつ

親鸞聖人ご和讃に
〃弥陀の名号となえつつ
信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして
仏恩報ずるおもいあり〃

弥陀の名号となえつつ
その名号のありたけが
弥陀の願心願力と
いただかされししあわせを
信心まことにうると聞く

仏恩まことに謝しがたし
仏恩まことに謝しがたし

よぼうて

〃弥陀・観音・大勢至
大願の船に乗しでぞ
生死の海にうかみつつ
有情をよぼうてのせたもう〃

ナムアミダ仏と
呼びたまい
ナムアミダ仏と
乗せたもう

大悲の極まり

親鸞聖人
唯信鈔文意に
〃口称を本願と
誓いたまえる！〃

口称を本願
口称を本願
口もとのご本願
口もとのご本願

口称を本願
大悲の極まり
口称を本願
大悲の極まり

呼びかけ

呼びかけ
呼びかけ
呼びかけ
呼びかけの声
ナムアミダ仏
〃汝（なんじ）
一心正念にして
ただちに来たれ
我よく
汝を護らん——〃

汝（なんじ）

わたしを「汝」と
呼びかける
どこまで逃げても
呼びかける
「汝」「汝」と
呼びかける

「汝」と呼ばれ
ナムアミダ
「汝」と呼ばれ
ナムアミダ

勅命

勅命
勅命
口もとの
勅命

今のお声の
ナムアミダ仏
勅命
勅命
口もとの
勅命

昭和四十七年五月十二日。
東本願寺同朋会館　門衛所にて

往生とは新生なり

花田正夫

名古屋の刑務所で処刑された某君がお別れの時

〃永い間色々とお世話になりました、ありがとうございました。先生私は死ぬのじゃありません、浄土へ生れさせていただくのです。この世では行くにも還るにも看守さんをわずらわしましたが、今度は自由自在の身となって、御迷惑をおかけした人々や、御心配して下さった方々に、存分おわびと御礼をさせていただきます。新しい門出です、南無阿弥陀仏、々々々々々」

と、合掌しながら平素の足取りで処刑場へ歩いて行ったと聞かされている。

これは私のよく存じあげていたS夫人のことであるが、復雑な家庭の間題に行き詰られたことが機縁になって、聞法の人となり、さいわいにも死の直前に疑雲が晴れると共に、随喜の涙の中から

「ありがとうございました。人面夜叉に等しい私をお見捨て下さらぬ大悲のまことにあい、御礼の言葉もありません。ナムアミダブツ、ナム……。

先生、結核の末期の私ゆえ、もうお見舞い下さいますな万一病気がうつりましてはあいすみません。

私の一生は御存じのように不幸なものでしたが、念仏の真実におあい出来ました上からは、最もしあわせの生涯でありました、ナムアミダブツ、ナム……。

この世ではお世話のなりっ放しでありましたが、今度はお浄土から御礼を申し上げます。ありがとうございました……」

と酸素吸入でたすけられながら、お別れの言葉をうけ、私自身はS夫人をとおして如来のみ声を聞かせていただいた次第である。

更に私自身、先年来大病をいたしまして、歎異鈔の九章を身にしみていただき、ことに後半の

「久遠劫よりいままで、流転せる苦悩の旧里はすてがたく、いまだうまれざる安養の浄土は、こいしからず候こと、まことによくよく煩悩の興盛に候にこそ。名残りおしくおもえども、娑婆の縁つきて、ちからなくしておわるときに、彼の土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきこころなきものを、ことにあわれみたもうなり。これにつけてこそいよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存知そうらえ云々」

の一言一句が、うつろな私の心になだれこんで、そのまんま私のいのちとなって下さった。

さらに蓮如上人のお歌かと聞き覚えているが

一人でも行かねばならぬ旅なるを
弥陀にひかれて行くぞうれしき

の一首も大きな慰安とはげましを蒙り、覚えず「死もまたわれなり」と、一番おそろしい、そして苦しく悲しい死をも、生と同様に、わが死であり、わが生であるとうなづくと同時に、不思議にも死の壁が破れて、通入出来る道光がさして来た。このことは大きな驚きでありよろこびであった。

しかし、今回は、死をわが死として受取らせて貰うばかりでなく、そこに永遠の生、浄土の新生の光を身にしみていただきはじめ、そこに無量光明土の浄土のひかりを仰ぐ次第である。

思うに、御名の御真実心が身にしみて以来、御名が私のいのちとなって、生ける日のいとなみを続けさせていただいているが、私の真実のいのちは南無阿弥陀仏であり、その願海に一味にとけて、永劫不滅の世界に、無窮不断の働きをさせていただけることは、何というよろこびであろうか？「はじめありて終りなき道、南無阿弥陀仏！」と近頃本願の名号を讃仰申している。

これも考一考すれば、私があらためて申すまでもなく、大無量寿経に、念仏往生の大道は、一切の釈尊の教法が消え失せてもなお「独り百歳留めん」と仰言っている。百歳といえば短いようであるが、これは次から次えと生れ出ずるあらゆる人々の全生涯を通じて、不滅の光とあらわれて、闇を破って下さろうとの思召しと頂いている。

歎異鈔に親鸞聖人は

「火宅無常の世界、煩悩具足の凡夫はよろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」

仰言っている。

これは、御家庭で橘姫が聞きとられた聖徳太子の常持語の「世間虚仮、唯仏是真」と自然に一致した不思議なお言葉である。

親子、夫婦、兄弟、師友とむつみしたしんで来ても、や

がては断絶されて行く恩愛のきずなである。

ナザレの聖者、キリストの最後の晩餐を十二人の弟子と共にして、ゲツセネマで最後の祈りに入った時、しばらくして洞窟から出て見ると、十二人の弟子は連日連夜の奔走に疲れて寝こんでいた。キリストは「われ祈りて死ぬるばかりなり」と告げると、皆の者は驚いて目を瞠まし低頭してわび入っている。やがてまた祈りに入って再び出てくると弟子達は綿のように疲れきって眠っていた。それを見たキリストは「ああ、肉は弱きものかな！」と独語して、眠れる弟子の上を涙をもって見やりながら、共に死を誓い合った師弟の間も、肉体の疲れはどうすることも出来ないことに満腔の同情を寄せて、そのまま最後の祈りに入り、十字架をうける覚悟を定めたのである。そうするより外に人類にのこす術は無かったのであろう。

次に、私の畏敬している故・安波勲八医師のことであるが、氏が胃ガンに気づき、九大医学部で検診の結果、すでに病勢がすゝみ、手術も不能になっていること知らされると、そのまま家に帰られた。その帰りの車中で、丁度三人目の子供を妊娠中とて、奥さんを驚ろかしてはならぬ、どうしたらよいかと色々考え続けて、家に着くと、「病気がよく分らぬので手術が延びたよ」と語られた。ところが奥さんはすでに主治医から聞いていたので「もう手術も出来ないのですか？」と泣き伏してしまった。二日二晩、色々と慰めてみても泣くばかりで手の施しようもなかった。三日目の晩仕事を終えて、どうして今晩は慰めようかと寝室に入っも見ると、奥さんはすっかり疲れきってグッスリ寝込んでいた。その時思わず「夫婦の涙も三日三晩か？」とつぶやかれている。

更に、知人で、平巡査から苦労して昇進して県警の少年係りの仕事をしていられたIさんが、子供だけはと願って大学を卒業させた時、今度の大戦に召集され、不幸にも戦死された。当時Iさんは仕事も手につかぬと悲歎の底におち悄然とお尋ね下さって縷々と衷情を訴えられた。子の無い私にはお慰めする言葉もなくお念仏申してばかりおりました。その後数年目に再び来訪されて曰く

「親子の別れは悲痛の極みでありますが、矢張り薄れて行きますが、段々深く思われますのは亡き父母の思出であります……」

と告白せられたことを覚えている。

恩愛の情こまやかに、如何に深くとも、時の流れに段々と薄らぎ消えて行く、限りある身の悲しさである。如何に断ち難い恩愛のきずなも、自分の力で切ることは出来ないが自然に解消されて行くのがさだめである。

ここに、大無量寿経の「独留百歳」の弥陀の本願を釈尊

はお勧め下さり、「世間虚仮、唯仏是真」の聖徳太子の信証があり、「ただ念仏申すのみぞ末通りたる大慈悲心」であり「ただ念仏のみぞまことにておわします云々」の親鸞聖人の御述懐は、まこと時空を越えて、尽未来際かけて、消えることのない万古不易の強縁となって、随時、随所に顕現して下さるのである。

おもえば支那の曇鸞大師が、大集経の大部を読破するにはまず長寿をと願われて、遠く江南に仙人をたずね、その仙術をきわめて帰られて、菩提流支三蔵に遭い、「仏法に長寿の法、これにまさるものありや」とたずねた時、三蔵は苦々しく大地に唾を吐いて、無量寿経を渡された。大師の目はここに開き、五十年百年のいのちを保証されてもやがて消えるいのちにすぎない、弥陀の本願を信じて念仏申すことのみが、無量寿の道であると知られ、仙人の経を旧履をすてるように焼き捨てられたと伝えられる。更に大師は、いのちが長ければ仏道に徹し学問も出来ると自己の分際をも忘れた憍慢さに大懺悔せられたことであろう。有名な大師の碑文に

「曇鸞法師康存の日、常に浄土を修す。亦つねに世俗の君子来りて法師を呵（か）して曰く。十方仏国皆浄土なり、法師何ぞすなわち独り意を西に注むるや。豈偏見の生に非ずやと。法師こたえて曰く、吾すでに凡夫にして智慧浅短なり。未だ地位に入らざれば念力を均しくすべけんや。草を置きて牛を引くに、恒に心を槽櫪に繋ぐべきが如し。豈縦放にして全く帰するところ無きことを得んやと。復た難ずる者紛々たりといえども、しかも法師ひとり決す云々」

とある。この「草を置きて牛を引くに、つねに心を槽櫪に繋ぐべきが如し」の一句は、長年道を求めて得られず、苦心惨怛されていた道綽禅師の心を打ち、「聖道の証し難きことを決して、唯浄土の一門のみあって通入すべき道なり」とたちまちに念仏の人となられたのである。

良寛さんの逸話に、或人が師に長寿の法をたずねると、良寛さんは「よしよしたやすいこと」と答えられて「一体何千年生きたいのか」ときかれると「いやそんに長くは」という。「それでは何百年か」と重ねて問われると、「いや百年も生きれば結構です、しかし老いぼれては楽しみもないでしょう」と述べた。

良寛さんは「お前達の願いは小さすぎる、仏は無量寿のいのちを与えようとされているのに云々」といわれたそうである。嗚呼本願にあい往生成仏の道を恵まれ光り輝く新生を展開させて下さるとは全く夢のような幸慶である。

あとがき

十二月は近角先生の御忌月として、求道誌から「諸の如来に等し」の御講話を転載させて頂きました。真実な仏心をお伝え下さる御苦心の程をありがたく拝読し、「よく説くこともかたければ、よく聞くこともなおかたし」の聖意にふれさせて頂きました。

さて近角先生を唯一の往生の知識として生涯をお喜びになった福岡の和才誠司様も亡くなられました。別府の妙好人と呼ばれた安波勲八医師と長い間信の旅を共にせられました。

福島先生から三十年前に亡くなられた柳川重行さんのことをお書き頂き、身に持つ業の深さ重さとその故に離れたまわぬ仏縁のありがたさを教えられました。

○

年若くしてひとり江戸に出た一茶は、俳界にいそしんで五十近くになって感ずるところがあって

月花に四十九年の無駄あるき

と詠じて、江戸の生活を閉じ、不仲で争い続けた異母弟とも和解して郷里に帰り

名月の御覧の通り屑家かな

これがこのついのすみ家か雪五尺

と詠じております。そこではじめて妻をめとり、子も次々と出来ましたが、どうしたことか早生し、

苦の娑婆や花がひらけばひらくとて

と苦衷を述べております。いよいよ晩年に

ともかくもあなたまかせの年の暮

と仏願に全托しております。歎異抄の「さればよきこともあしきことも業報にさしまかせてひとえに本願を仰ぎまいらせた」信境であります。歳末ともなりますとこの一茶をいつも思い出されるままに誌しました。

はてしのない生死の苦海にあって、常に乗せて渡して下さる願船のたのもしさ一つを歳末に一茶の言葉を借りて申上げました。朝日新聞に「ポックリさん」のことが出ておりましたが老人が老醜をさらし痴呆とならないように、ポックリと死にたいという願いからあちらこちらで参詣者が多いとか。まことに笑えぬ悲惨さであります。一茶も晩年中風でたおれ難儀な生活をしておりますが、身にもつ業の現われとして、私自身どういう業さらしをいたしますことかわかりません。その随時随所に御一緒して下さるあなたのおちからによりまつるばかりであります。

御案内

○毎月第一、二、三日曜、午后一時半、一道会例会。
市電、新郊通り下車、東入ル三筋目、左入ル二軒目。

○毎月二十四日、午前、午后。昭和区小桜町、教西寺法話会。
市電、御器所通り下車。
市バス、北山下車。

定価　半年　四〇〇円（送共）
　　一年　八〇〇円（送共）
名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　吉野穂志郎
名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番
那便番号四五七

慈光第二十四巻　第十二号　昭和四十七年十二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可